
メンタル・レンタル

ソルト

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

メンタル・レンタル

【著者名】

ソルト

【Zコード】

Z8027T

【あらすじ】

メンタル・レンタル

それは都市伝説としてその街に存在した。

ねえ知ってる？ メンタル・レンタルのこと。そこに訪れると貸してくれるらしいよ。優しいとか明るいとかの性格を何でも。お店とかあるわけじゃなくて……お金？ お金なんて取らないよ。料金は——

一度覗いて見て下さい。お客様には特別にご覧いれましょう。
メンタル・レンタルの本当の姿を……ね?

ある街の都市伝説（前書き）

連載つて言つても直ぐに終わるので、じーん。

それではお客様、良い時間を。

どうも皆様初めまして、失礼ではありますが物語に関わるので自己紹介は控えさせて頂きます。おや？少し驚かれているようですね。小説の人物が喋りかけるのはおかしい？しかし^{わたくし}私は見えるのですよ。貴方様の表情が……くつきりとね。おつと、前置きが永くなつてしましました。それでは語りましょう、私のお客様のお話を。

――――――

「ねえ」

中性的な顔立ち、細身の身体に程よく付いた筋肉、漢字で表せば容姿端麗、頭脳明晰、運動神経抜群。気さくで分け隔てのなく優しい、だけど頼れる性格。

「駄目だ……またトリップしてる」

クラスだけではなく学校中からアイドル視されている彼に私は恋していた。いや、恋してる。

「美月！」

肩を思い切り叩かれ我に帰る。

「う、ごめんなさい！」

条件反射で机から立ち上がり頭を深々と下げた。

「いいから座つて！ こいつまで恥ずかしくなるから」

そう言われて周りを見渡すとみんなが一ヤ一ヤしながら見ていた。しかし直ぐにみんなは反らし、『お食事を食べながら友達との談笑を始める。美月のこのよいうな奇行は一年生の頃からなので慣れているのだ。

ふと先ほどまで見ていた男子と目が合つた。彼はにこやかに手を

振つてくれたが私はすぐさま席に座り、顔を背ける。

「どしたの？」

「聞かないで陽子」

私の顔を訝しげに見た後陽子は気付いたようだつた。

「愛しの雨宮君と田でも合つた？」

「ちつ、違うよ！」

顔全体が真つ赤になつたのを自分でも感じた。恥ずかしい。

「わかりやすいなあ美月は、もうすぐ卒業、花の女子高生も終わつちやうんだし、そのこと告つちやえば？」

陽子は冗談混じりに言つたつもりだと頭で理解しながら全力で頭を横に振る。

「無理だよ……喋つたことないしネクラだし地味だしメガネだしきタイルだつてよくないし頭だつて中途半端だしそうに——」

「はいもうやめ！」

「……いたい」

軽いチョップが頭にのし掛かつたので、痛みなど感じていないがとりあえず言つておく。

「とりあえずその性格を直さないとね」

「私だつて治したいよ」

昼休みが始まる前に買つて置いたメロンパンを開ける。陽子は手作り弁当だ。顔もいいショートカットの明るいサバサバした陸上部のエース。男の子よりも女の子にモテている。はつきり言つて私は真逆の存在。その事実がさらに私を落ち込ませる。

「それならさつきの話し、美月にピッタリかもね」

「フェ？ フアンノハファシ？」

「……まずは飲み込みなさい」

陽子に促され、急いで飲み込む。

「何の話し？」

「あんたがトリップしてる時に話したやつ」

まるつきり聞いていなかつたので首を傾げる。半ば呆れ顔の陽子

がため息混じりに話しを続けた。

「メンタル・レンタルだよ」

「メンタル……レンタル？」

聞いたことのない単語に再び頭を傾げる。

「心を貸してくれるらしいよ。喜怒哀楽の感情から明るいや優しいといった性格まで何でも」

喋りに合わせて口口口と表情を変える陽子の話に、メンタル・レンタルの話に心が揺れた。

「それはどこにあるの？」

「お店とかがある訳じゃないの。朝方でも夕方でもどこでもいいから4時44分44秒に扉を開けるの、そしたらメンタル・レンタルに繋がるんだって」

「……それで？」

メロンパンを食べる事を放棄し、話の先を促す。陽子はおもむろに私のメロンパンに手を伸ばし、一口かじった。

「終わり」

「……え？」

メロンパンをさも自分の物のように食べ続ける陽子。

「これで終わり、だつてこれ都市伝説だよ？ 実際に行きましたみたいな話しても聞かないしね。あたしもやってみたけど何も起らなかつたし」

陽子は半分ほど食べたメロンパンを私の机に置き、一氣にお茶を飲む。

「ほら！ 昼休み終わっちゃうよ。次は体育だし着替えなきや」

陽子は立ち上がり、バックを持つと駆け足で教室の扉に向かう。私は残ったメロンパンを食べる気が起きず、机に掛けてあるバックに手を伸ばす。

その目線には白い布とその間から見える縄のようごく白い子供の足があつた。

「変わりたいの？」

明るい声が聞こえた。

「変わりたいよ」

条件反射で答えてしまったがすぐさま頭をあげる。だがそこには誰もいない。辺りを見渡しても誰一人気付いていない。気のせい、私は自分にそう言い聞かせ、メロンパンをバックにしまつ。気のせい、気のせいだがあれは確かに。

「女の子の……声」

そのまま昼休みは過ぎていった。

――

「今日は走り込みだ！」

筋肉隆々の教師が白いタンクトップにジャージといついかにも体育会系ですと言わんばかりの格好で死の宣告をする。

男子女子問わず不平の声をあげるが体育教師は有無を言わさず、実行した。

「もう……いや……だ」

三周目に入り早くも私は息が上がっていた。当たり前だが後ろから数えたほうが早い。

「若人よ、苦労しておるな」

陽子が後ろから声を掛けてくる。もちろん私より足が遅いという訳ではなく、私より一周多く走っているから後ろにいるのだ。

「話し……掛け……ないで」

体力を少しでも温存しようと拒否を示す。

「じゃあ私が一方的に話すね。さつきの都市伝説の続き」

その言葉に私はすぐさま耳を傾けた。

「本当にわかりやすいなあ、んでね、さつき詳しく友達から聞いたんだけどさ。メンタル・レンタルに入るには開ける方法を知つていいプラス、資格が必要なんだって」

喋りながら息切れ一つない友人を疎ましく思いながら田線で先を

促す。

「それで資格を持っている人には現れるらしいの、絹のように白い肌を持つた血のように赤い目の中の女の子が」

心臓が飛び跳ねる。今の話しか聞いたからではない。私の走っている先に、雪のように白い腰まである髪、絹のように白い肌。全身を白いマントで包みこんだ小学一年生くらいの女の子が私をじっと見ていた。血のように赤い目で。

「まあ資格が何なのかはわからないらしいんだけどね」

隣で走っている陽子には見えていないようで喋り続けていた。足を止めようにも私の意思に逆らうように走り続けた。

「変わりたいの？」

昼休みに聞いた声が聞こえる。声がでない、代わりに心の中で答えた。変わりたいと。

「今の自分を無くしてでも？」

なおもその声は問い合わせた。私は考える。

「そうそう。料金なんだけど、お金はいらないらしいよ。何でも

――

ウジウジと悩んで、好きな人には白い出来ない自分なんていらない。私は……変わりたい！

「その人の人生なんだって」

その瞬間、世界が暗転した。

――

「……ここは？」

「保健室だよ」

明るく幼い女の子の声にベッドから飛び起きる。横を見るとボンヤリとしか見えないが誰かがいるのはわかった。

「はい、これ眼鏡、ごめんなさい。いきなり気絶させて」

眼鏡を受け取り、掛けると今度ははっきりと見えた。丸椅子に座

つた先ほどの、全身が白い赤い目をした女の子がいる。

「君は……誰なの？」

「おしえな～い」

女の子はクスクス笑うと丸椅子から立ち上がりベッドにもたれかかってきた。

「まだね」

「まだ？」

女の子はベッドから離れるところくるくる回り始める。

「ここまではみんなが知ってる話し、じゃあ女の子の名前やこの先を知る人は誰でしょ～か！」

ピタッと止まり、振り向いた顔はいたずらっぽく笑っていた。

「踏み入れた人達だよ。見て」

女の子が指差す方向を見るとあるのは時計。時刻は4時43分だった。

「チャンスは1度だけ、それに怖じけづいた人達が噂を広めたの」

女の子は楽しそうに、歌うように語る。

「貴女は変われる資格を得た。後は掴むだけ。だけどその勇氣があるかな？ かな？」

私はベッドから立ち上がり、ゆっくりと歩く。

「料金は知ってるよね、大きい大きい代償を」

私は保健室のドアにたどり着く。『扉』に。女の子はなお楽しそうに歌う。

「開けるといつことは否定と同義、今までの自分を全否定すること

時刻は既に44分。

「勇気があるかな？ かな？」

私は『扉』に手を掛ける。

「開けられるかな？ かな？」

「私は……」

手に力を込める。

「変われるかな？ かな？」

「言われなくても……変わつてみせる」

「ならば開けよつー 貴女の鍵を、ならば畠えよつー 貴女を変えてくれるその名を…」

「メンタル・レンタル」

『扉』は開かれた。中の様子を確認する間もなく引きずり込まれた。

「名前はね、メイつて言つんだ！ 覚えてくれると嬉しいな。また向こうでね」

メイ……その名前をしつかり刻み込むと美月は流れに身を任せ、目を瞑つた。

「お姉ちゃん！ お姉ちゃん！」

「メイ……ちやん？」

聞き覚えのある声が頭に響く。私はゆっくりと目を開ける。目の前には満面の笑みを浮かべたメイちゃんがいた。

「覚えてくれてたんだね！ わーい！」

抱き付いてくるメイちゃんに抱き締め返しながら辺りを見渡す。

「本が……一杯」

円形に作られているこの部屋は所狭しと並んだ本棚しかなかつた。その本棚一つ一つにびっしりと本が詰まつており、天井が見えないほど上がある。

「メイ」

優しげな若い男性の声がした。

「はあーい」

メイちゃんは私から離れるとどこかに走つていぐ。私は起き上がりメイちゃんが走つていった方向に目を向ける。山高帽をかぶり、手に黒いステッキを持ち、モーニングスーツで決めた気品ある肉体と併まい。メイちゃんと同じ血のよつて赤い目、しかしその顔は…。

「ウサ……ギ？」

「いらっしゃいませ美月様、よつこそ我がメンタル・レンタルへ」

「ウサギが……喋った」

私は酷く混乱した。いくら肉体の姿形が人間であろうとも顔がウサギであれば異形。不安になり自分の顔を触つてみると眼鏡を掛けている。

「あれ……掛けないのに見える」

「驚かれるのも無理はありません。美月様の常識が崩れてしまつたのですから、視力に関してはこここの影響ですね」

ウサギが若い男性の声で優しく語り掛けてくれる。メイちゃんと同じ赤い目が光つた気がした。

「まずは気を落ち着かせましょ。」

ウサギは指を鳴らすと私はいつの間にか豪華な椅子に座つていた。目の前には貴族が使うような丸テーブル。私が使つている椅子の他に一脚ある。ウサギとメイちゃんが近付いて来るとメイちゃんが私の隣に、ウサギは対面の椅子に座る。

「失礼しました。お飲み物は紅茶、玉露、烏龍、珈琲多種多様とありますか?」

指を鳴らす度に紅茶、玉露、烏龍、珈琲と丸テーブルに現れる。そして消えていった。

「メイはね~、リングジュース!」

メイちゃんは少しも驚かず、手慣れた様子でウサギに注文をつけ る。

「かしこまりました、可愛いお嬢様」

ウサギが指を鳴らすと綺麗な琥珀色の液体が入ったガラスコップがメイちゃんの皿の前に現れる。もう一度指を鳴らすとストローが空中に現れ、コップの中へと入った。メイちゃんは何の躊躇いもなく手に取ると美味しそうに飲み始める。

「美月様は?」

「……紅茶でよろしくお願ひします」

それから少しの間お茶会を楽しんだ。わけのわからないことだらけだが紅茶は今まで飲んだことがないほど美味しいし、シフォンケーキやクッキーも頂いた。一杯目の紅茶を飲み干す。

「落ち着きました。ありがとうございます」

「いえいえ、こちらこそ楽しい一時を過ごせたことを感謝致します」

ウサギが指を鳴らすと先ほどまであった紅茶やクッキーが消える。

「あっ、クッキー……」

メイちゃんが悲しそうな声色で虚空を掴む。

「お茶会は終わりですよメイ」

「ちえ~」

メイちゃんは椅子から降りるとどこかへ走り出す。メイちゃんの姿を田で追うが。

「美月様」

唐突に話しかけられビクッつとなる。

「申し遅れました。私は力不足ながらもここに支配人をやらせて頂いております。アデムと申します。以後お見知りおきを」

「たつ、橘 美月と申します!」

立ち上がり頭を深々と下げる。そろそろと頭をあげると疑問に思つたことを解決する為に尋ねようとするが。

「此処に關することは後程、美月様にはその前にやるべきことがあるでしょ?」

アデムさんに先手を取られた。

「顔に書いてありますよ」

微笑んでくれた……のかな? ウサギ顔だからアデムさんの表情は読みづらい。

「えつと……私は変わるために来ました。今の自分を変える為に」

「存じております」

「この暗い性格を治したい、このマイナスな思考をなくしたい」アデムさんは此方を見つめながら話しかけてくれる。

「お願いします！ 私に貸して下せ…… 明るい心を…… 魂気を」「わかりました。メイ」

「はいはーい」

声のするほうを見るとメイちゃんが分厚い本をヨタヨタと持つていた。その数は5冊。

「美月様は感情がいくつあるかわかりますか？」

「え？」

アデムさんはメイちゃんから1冊づつ受け取るとその本の上に被つている埃を払いながら話しを続ける。

「喜・怒・哀・楽、基本はこの4つです。そしてこの4つが混ざり合い、生まれるのが性格です。ここまで大丈夫ですか？」

「大丈夫です」

「それでは、この部屋に何冊あると思います？ 上のほうにあるのも含めて」

辺りを見渡して本棚という本棚を見る。これだけ広いと1階に付き10万冊はあるはず、100階あると仮定すると……。

「1000万冊くらい？」

「約69億冊と特別な本が4冊です」

その答えに驚愕する。あり得ない蔵書量だ。

「4つしかないのに性格というのは似てこない」とがつても同じのはない」

その言葉を聞くと氣付く。同じようで同じのはない。そして69億冊という膨大な量、いや数、つまり……。

「気付かれたようですね」

「地球の……総人口」

「その通り、ここは人類の心を管理する場所。勿論美月様の本も此方に」

茶色い革に包まれた本を手渡される。表紙にはこう書かれていた

【橘 美月】と。

「どうぞ開いて下さい」

手が震える。しかし開けなければならぬと何かに突き動かされた私は表紙をめくつた。そこには顔写真と——。

「お姉ちゃんつて喜と怒が極端に低いね！ 哀高～い」

喜・怒・哀・樂という文字の横に棒グラフのような物が書いてあった。メイが横から覗き見てやけに明るかつた。

「はしたないですよメイ、見せて頂いてても？」

私は黙つてアデムに渡す。

「確かに極端な方だ。自分を誰よりも低くみるから喜べないし怒れない。樂はある程度ありますから友人とは少しだけ話せますね。他人とは人見知りを通り越して喋れない」

全て当てはまる。恥ずかしいという感情等なく、逆に感心してしまつた。アデムさんは本を閉じる。

「それでは」

アデムが手に持つていた本をテーブルに並べる。その本にはそれぞれ【喜の章】、【怒の章】、【哀の章】、【樂の章】と書かれていた。

「そしてこれ

茶色い革に包まれた本が置かれるタイトルも何も書かれていない。

「ゴロー」

【橘 美月】の本にアデムの右手が置かれる。

「ペースト」

タイトルのない本にアデムの左手が置かれる。アデムが手をどけるとタイトルのない本にタイトルが刻まれていた。【橘 美月】と。『複製完了』、始めましょうか、性格の構築を、『もう1人の貴女』を

寒気がした。アデムの声は相変わらず優しい。しかし何故かはわからないがその時初めて。アデムが恐かつた。その考えを理性で扱いのける。アデムさんが恐いはずがない。

「明るく、勇気のある性格でしたね」

アデムさんはそう言うと【喜の章】、【怒の章】を開く。

「【喜の章】よ、彼の者に与えたまへ、他人の喜びを自分のことの
ように喜べるよに喜びを、【怒の章】よ、彼の者に与えたまへ、
未知へ踏み出せる怒りを」

それぞれの本から青い光の玉が現れ、複製された【橘 美月】の
本へと入る。棒グラフを見てみると確かに喜と怒の部分が高くなつ
ていた。

「【怒の章】が勇気なんですか？」

怒るという感情にマイナスなイメージしか湧かない私はアデムさ
んに尋ねてみる。

「怒りというのは時に理念を超える物です。試してみればわかりま
すよ」

マイチ納得出来ないまま終わる。アデムさんは次に【哀の章】
を開いた。

「哀しみはどう致します？」

「いつ、いらないです！」

今まで言いたいことも言えずに泣いてばかりの人生だった。その
感情がなくなるなら万々歳だ。

「いいのですか？ 泣けないということは相手に共感すら出来なく
なるということです。分かち合つことが出来ないということですよ
？」

「……お任せします」

「かしこまりました、それではこのまま、楽も十分ですね。メイ
一瞬で諭される。メイちゃんは喜・怒・哀・楽の本を持つとビビ
かへ走り出した。

「さて、美月様、これで貴女様は手にいれました。理想とする性格
を」

「……はい」

「しかし、あくまでも貸すだけです。理想とする性格を持つて、何
がしたいのですか？」

手に汗を握る。ここまで来たのだ。どうせなら欲張つてしまおう。

「雨宮君と……雨宮君と、付き合いたいです」

「わかりました。それでは貸し出し期間『雨宮様と付き合つ』までですね」

「……はい」

アデムさんが指を鳴らす。やつすると私は光に包まれた。アデムさんの声が頭に響く。

「目覚めた時には既に反映されています。それでは『武運を』お姉ちゃん頑張ってね！」

目を開ける。身体を起こし、辺りを見渡すと仕切られているカーテンしか見えない。

「保健室のベッド……あれは、夢?」

ベッドから降りて携帯の時刻を見る。時刻は4時45分だった。もしあれが夢じゃなくて本当だったとしてもたつた16秒のはずがない。とりあえず保健室から出ようと鞄を持ち保健室のドアを開ける。

「おっ、大丈夫そうだな。眼鏡は?」

「雨……宮……君?」

目の前には私の恋い焦がれる存在、雨宮君がいた。

「あの、えっと、眼鏡はやめてコンタクトにしてみたの、どうかな?」

?

「絶対そつちのほうがいいって! めつちや可愛い」

褒められて内心ガツツポーズを取つていると雨宮君は突然私の手を引っ張り保健室の椅子に座らせられた。そして紙を渡される。

「ほれ、一応書いてくれな。俺、保険委員だからよ」

何てことはない保健室利用書だった。引っ張られた手が熱い。胸が高鳴る。とりあえず落ち着かせる為に書く。

「走つてる途中で気絶したからさ、俺が運んだんだ。」

「本当に? ありがと!」

何故私は雨宮君の目を見れるのだろう、何故私はこんなにも自然

に話せるのだね。雨宮君は急に顔を背けると頬を書く。
「まあ、俺は堂々とさぼれたし、お礼言われるほど大したことって
ね～よ」

「それでもありがとう、助かったのは事実だし」

私が私じゃない感覚。眼鏡を掛けなくとも大丈夫だし、アデムさんの言葉が脳裏によがかる。

（田覚めた時には既に反映されています）

あれは……夢じゃなくて本当？ これが私の望んだ性格、理想の自分。でもやっぱ怖い。

「雨宮君ー。」

「ねー、ねー、ひづいた？」

「ずっと、ずっと好きでした。付き合つて下さーー！」 言つた。言つてしまつた。ブレーキを踏むどけフルスピードで駆け抜けてしまつた。

「お前の……橋の気持ちには答えられない。彼女いるから」

その後の事は覚えていない。気付いた時には既に部屋で泣いていた。

泣いた次の日、つまりは今日なのだが、失敗に対しても引き摺つてどんよりとした気分なはずなのに今朝は妙にスッキリしていた。

「これもアテムさんのおかげかな」

前とは明らかに違う心境の変化。私は半信半疑だったメンタル・レンタルの存在を、効果を確信した。

私はベッドから跳ね起きるとすぐさま着替える。洗面台で歯磨き等を済ませ、リビングへと向かった。

「お母さん、おはよ」

水の流れる音とともに台所に立つお母さんの姿が見えた。お母さんは私のほうに振り返るのだが直ぐに前と向きなおす。

「おはよう、朝御飯出来るわよ」

おそらく目の腫れに気付いたのだろう。その事に触れないでいてくれるのが嬉しいような悲しいような複雑な気分になる。

朝食を食べたらもう一度顔を洗おうと心に決めた。テーブルの上を見ると1人分の朝食、私の分しかないといふことは既に父は仕事に行つたらしい。

「美味しそう！ いただきま～す」

味噌汁と焼き鯵、ご飯に納豆と典型的な和の朝食。時計を見ると少し危ない時間だったので急いで搔き込み家を出る。

「行つてきます！」

「美月！」

母は呼び止めるよくな声で私の名前を叫ぶが私は立ち止まりずして家を出る。

走った。それも全速力で、体力のない人間なので直ぐに走るのを止めたが気持ちよかつた。

いつも通りの速さで歩いて通学する中、一つの疑問が頭に過る。ア

デムさんは『雨宮様と付き合つまで』と言つていた。それがものを見事に玉砕。しかも彼女がいるからつていう努力しても無駄といつ止めの一撃。

私はずっとこのままなのか？

「それでもいいか」

理想の自分になれたのだ。確かに雨宮君とは駄目だった。だけど人生まだまだこれから、前向きなのか、楽観的なのかわからなくなつて一人苦笑する。

「おつはよ～！」

教室に着き、元気よく第一声。教室の時間が止まる。

「……あれ？」

摩訶不思議な力で実際に止まつた訳ではない。クラス中のみんなが驚いて固まつてしているのだ。

しかしそれも一瞬、直ぐに騒がしくなつた。

「やつぱりあれ本当っぽいな」

「昨日までは別人じゃねえか」

「眼鏡掛けてないね、イメチエンかな？ それとももう吹つ切つたつて事かな！？」

「あれ？ 可愛くね？」

友達同士で話してゐつもりらしいが聴こえる。教室の入り口から動いていない私を陽子は引っ張つて席に連れていってくれた。その途中、雨宮君と目が合い、手を振つてみる。雨宮君も手を振り返してくれるが、雨宮君の隣にいる男子まで手を振つてくる。

「頑張れよ」

何故かその男子に応援され意味がわからない。陽子に引き摺られ席に付く私。机を挟んで目の前にいる陽子が目をつり上げていて少し怖い。

「吐け」

「……はい？」

「お～けい、しらばつくれるつもりだな？ もつと明確にしよう」「両手を左右にやれやれ、と咳く陽子。何故私はここまで緊張しなければならないんだ。

「告つたな？」

「パードゥン？」

「告白したんでしょ！」

机をバンと叩かれて少しふくつへ。陽子はそのまま溜め息を吐き、机に寄りかかるように座り込んだ。自分で焚き付けておいて何様なんだこいつわ。

「何よ～、陽子が言つたんでしょ」

「半分どこか九割方冗談だつたんだけどね。まさか本当にやるとは……それに今日はやけに明るくない？」

心臓が高鳴る。言つべきなのか、メンタル・レンタルの存在を。実際に訪れたことを。

「美月、もしかして——」

ハツとする表情、これはもうバレてる。もつ言つしかない。

「あのね、実はメン「振られたから無理に明るくしてやるわね」

「……えつ？」

「いいのよそんなことしなくたって、そんな貴女に朗報が」「う、うん

少し安心する。別に無理して言わなくたっていいじゃないか。信じてくれるかも怪しいし。心配を掛けないよつ、怪しまれないように『前の』自分に少しだけ近付けよう。

「雨宮君に彼女がいるのは知つてゐるよね。でもその女かな～り嫌な人らしいよ。」

「何でそんなこと知つてゐるの？ てか彼女いるの知つて告白したことか言ったの！？」

陽子は首を横に振ると指を指す。その先を見てみると先ほど頑張れと言つてきた男子生徒。

「情報提供者の片山君」

「なるほど」

応援されたのもこれで合点がいく。親友が辛い目にあつてるのは見過ごせないぜ！ みたいな男の友情だらう。

「ちなみに噂が広まつた原因も彼

殺意が湧いてきた。

「まあ細かい話しさ後でね。学校が終わった後片山君と待ち合わせてるから」

「ん、了解」

まだチャンスがあるかも、と淡い期待を持ちながらその日は何事もなく学校が終わる。何故か待ち合わせ場所に直行ではなく、私服集合なので一度家に帰り、待ち合わせ場所に向かった。

待ち合わせ場所は駅近くの喫茶店、まだ誰も来ていない、部活をしているのは知っていたので一人紅茶を飲みながら待つ。暫くすると陽子と片山君が一緒に入つて来た。何かを探すような素振りをすると私に気付き、一緒に席に座る、片山君は向かいの席だ。この二人、出来てる？

「部活が一緒なだけ」

心を読まれた！？ 少し焦りながら紅茶を飲む。片山君を見ると細かく震えていた。具合でも悪いのか心配すると。

「あん……た……キヨドリすぎ」

笑いを堪えているだけだった。片山君は深く呼吸をし始める。そうすると落ち着いたのか震えが止まる。

「悪いな、笑いの沸点が低いんだ。俺は片山 健次、よろしく」

「橋 美月です」

自己紹介を済ませると店員を呼び、それぞれアイスコーヒーとカフェオレを頼んだ。会話の切り口が見つからないのか、無言のまま片山君の視線をやたらと感じる。

「橋つてさ、可愛いな」

突然の不意打ちに紅茶を吹き出してしまった。

「あ、悪い。いつも眼鏡掛けてて地味なイメージしかなかつたからさ、ギャップというか何というか、春人^{はるひと}が放つて置けないのも納得だわ」

「雨富君が？」

「そつ、まあ順序だてて説明する」

そう言うとアイスコーヒーを一口飲む。

「あいつさ、中学の頃人間不信になつて引きこもつてたんだよ。今は全然違うだろ？」

確かに想像も付かない。私と陽子は無言で頷く。

「人間不信だつた春人を変えたのが今の彼女なんだよな。カウンセラーとして訪れて、そのまま付き合つたらしい」

私はガックリと肩を落とす。何それ敵わなくね？ 私は淡い期待を持ちながらここに来たのに何故そんな話し聞かされるの？

「話しあは最後まで聞けつて、俺も最近までは良い人だと思ってたんだけどな。その彼女を外で偶然見掛けたら男と歩いてやがる。心配性な俺は調べてみた訳よ」

そう言つて片山君はファイルを取り出すと私に手渡す。中を見ると二十代後半の綺麗な女性と高校生っぽい男が二人楽しそうにしている笑つて歩いている写真だ。捲っていくとどれもいかにもなカツブル写真。しかしどの写真も同じ女性なのに男性はどれも違つていた。最後の方は男性達のプロフィールのようだ。

「探偵つて凄いよな。それが春人の彼女、男は全部彼女の元患者、それが手口らしいね」

片山君がどうやつて調べて何故こんな写真を持っているかはどうでもよかつた。哀しみと怒りが沸き上がる。陽子は既に知つていたようでさして驚いた様子もなく、私の背中を擦つてくれた。

「春人にはまだ何も言つていない。言つつもりもない。完全に壊れる可能性があるからな」

「……何で私に？」

私の知らない雨宮君が一杯いた。表面しか見ていなかつた。自然と涙が込み上げてくる。

「支えが必要なんだよ。彼女に代わる新しい支えが……」

「呼吸にも満たない間。

「お前は春人と付き合いたい、俺は女と春人を別れさせたい。目的地点は違えど通過点は一緒じゃねえか」

右手が差し出される。私は迷わずその手を取つた。

「話しが早いな。短期決戦で行く」

片山君は胸ポケットから紙切れを取り出すと、テーブルの上に置く。誰かの電話番号が書かれていた。

「その女の携帯番号、ここに呼び出して話しを付ける

その時、ずっと黙っていた陽子が立ち上がる。

「私帰るわ、何か場違いつぽいし。陰ながら応援してるよ」
「何で？」と言いたかった。だけどよく考えたら陽子は全く関係ない、故に付き合う必要もない。

「そつか、わかったよ。ここまで手伝ってくれてありがとね陽子」「美月——頑張つてね」

何を言い掛けたのだろうか、陽子の笑つた顔は何処か苦しくて、悲しそうだった。私はそれに気付かないフリをして見送る。今は目の前のことからだ。

「陽子も帰っちゃつたけど、私は何すればいい？」

「帰れ」

きつと私は今凄くマヌケな顔をしていることだろう。それほど迄に予想外の言葉だった。

「俺と橘の接点は隠しておいたほうがいい。後々面倒になるかもしないから。橘はあいつの支えになつてさえくれれば

「嫌、一発殴るまでは絶対に帰らない」

その他にも失敗する可能性は少しでも減らしたいや冷静でいられない等色々言われたが私は譲らない。

結局、折衷案として絶対に大人しくしているといつ条件で残つた。

殴るのは我慢しよう。

「んじゃ、掛けるぞ」

私が掛けるわけでもないのにドキドキする。

「もしもし、片山と申します。雨宮の友達と言えば」理解頂けますか?」

耳を澄ますが電話越しでは相手の声が聴こえない、聴こつと身を乗り出すが片山君に手で払うような仕草をされ、大人しく電話が終わるのを待つ。

「ええ、はい、わかつています。雨宮には言つていません。直接話し合いましょう、場所は——」

そうして電話は終わつた。緊張していたのか、電話を切ると深い溜め息を洩らす片山君。

「とりあえず呼び出しには成功した。1時間で来るっぽい」

そこからは話しもせず無言だつた。片山君はただ、お前のやりたいようにやれ。その一言だけ発すると腕を組み、窓の外を見る。私はこの後のことを考える。彼女が来たら私はどうすればいいのか、終わつたら雨宮君とどう接しようか。

色々考えた、けど結局考えるのは止める。いくら考えたって、いくら想像したつて本当の答えはわからない。今私の正直な気持ちをぶつけよう。心が軽くなつた気がした。

誰かの入店を告げる軽快な音楽が流れる。見た瞬間緊張が走る。あの人は、あの写真の人だ。あの人のせいで雨宮君は騙され、あの人のせいで私は振られたんだ。自分の中のワガママな部分が憎悪を、自分の中の雨宮君を想う部分が哀しみと怒りを生んだ。理性が何処かへと飛ぶ。

乾いた小気味の良い音が店の入り口で鳴る。いつの間にか私は入り口まで歩いて行き、頬を平手打ちしていたのだ。目の前の頬を打たれた女性はわけがわからないと表情で表していた。もう一発やろうかな。不意に後ろから肩を掴まれる。

「こきなり過ぎるだろ。それにもう止めとけ」

自分の息が荒くなつてゐるのに気づいた。今は少しだけ冷静だが、この女の声を聞くだけでも感情を抑え切れる気がしない、悪いとは思うが、全てを任せることにした。

「「めん、やつぱり帰るね」

帰らうとするが一つ気になつたことを聞いてみる。

「何で片山君は雨宮君のことをそんなに?」

「……友達だからかな。よくわかんね、気付いたら動いてた」

親友じゃないんだ。と割りと関係のないことを考え、田の前の憎い女性を無視して店を出る。この答えを深く考へることはなかつた。「申し訳ないですね。感情の起伏が激しい子なので」「本当に踏んだり蹴つたりだわ、いきなり平手打ちされるし、貴方のよつな子に脅されるなんてね」

「交渉術と言つて下せ。ちゃんと断る選択肢だつてあるんですから、それでは始めましょうか。交渉を……ね」

母とはまだ気まずい関係だがそのついでにも通りになるだらう。家で「ゴロゴロ」としていると携帯が鳴る。片山君からのメールだった。「成功した。今日中に別れるらしい、俺にやれるのはここまでだから、後は任せる」

嬉しさが込み上げてくる。後は私が頑張るだけ、不思議と不安はない。

「頑張るよー」

それだけ打つと私は明日に備え寝た。

結局は明日の予行練習を頭の中でイメージしてたら寝ねず、やつと寝れたかと思えば遅刻ストレス。教室に着くと私は雨宮君をちらりと見たが遠田からだといつもと変わらない、むしろ明るく見えた。

そういえば学校に来ない可能性もあつたんだよね……とユーチューバーを考

えながらその日の午前中を過ぐす。

決戦は毎時。意を決して雨宮君の所へ向かつ。

「雨宮君」

「橘か、どうしたんだ?」

「きいちない笑顔、昨日の私もこんなだつたのかな。近くで見ると目の周りが赤くなつてゐるのがわかつた。

「ちょっと具合悪いから保健室までついてきてくれないかな?」

「ん~、いいよ」

雨宮君は迷つてゐようつだつたが片山君が笑つて背中を叩くと立ち上がり来てくれた。

保健室の中に入り体温計で測る。雨宮君は帰りつゝはせず隣に黙つて座つている。

「昨日、私告白した……よね」

「……ああ」

「その日はずつと泣いちゃつて、泣いて、諦めようつて思つたんだけど……や」

雨宮君の顔は氣まずくて、恥ずかしくて見れなかつた。

「でもやつぱり、雨宮君の顔が浮かんで来てさ、無理だつた」

「彼女とは別れた、つても一方的に別れを告げられただけだけどな。これで俺が断つた理由は消えた訳だ」

知つてゐるとは言えない。どういう顔をしていいのかわからず、私は俯く。

「だからとつて俺は今すぐ付き合つとかは無理だ。橘のこと良く知らないし、心の整理もしたい」

「それじゃあ……待つてる」

これは騙しているんじゃないのだろうか? 無理だつたと言つたが私は吹つ切つていた。ほとんど何もしてないとはいえ別れた原因にも関わつてゐる。頭の中が渦巻く中、自然と言葉が出てきた。

「彼女の代わりになれるともなりたいとも思わない。彼女の幻影じ

やなくて私を見て欲しいから、だから整理がつくまで待ってる」
そこで始めて雨宮君の顔を、ちゃんと見た。雨宮君は、泣いていた。本当に好きだったんだなと痛感した。心が色々な意味で痛む。
「あ！ 待ってるって言つてもアピールはするからね、覚悟してよ？」

「……お前まで泣くことないじゃないか」「気にしない！」

それから一ヶ月後、私達は正式に付き合うことになった。今では春人君と片山君、私と陽子の四人で遊ぶよくなつた。私は今凄く幸せです。アデムさんとは会つていない。料金とか大丈夫なのか不安だが何かあれば向こうから来るだろ？

「美月つてさ」

「どしたの陽子？」

しかし——。

「変わつたよね」

「ん~、確かに明るくなれた気がする」

「何故だらうか？」

「違う、何かこう……根本からというか？」

「何それ～！ 私は私です～」

「だよね～、何言つてるんだろ私！」

笑うのが辛い、ううん、気のせいだよね。私は私、本当に、心から幸せ。

【橘 美月】の物語は楽しんで頂けましたでしょうか？ これにて完結です。

冒頭では名乗らず失礼致しました。お気付かでしようが、私がメンタル・レンタルの管理人、アデムです。ここからは貴方様方に種を植え付けたいと思います。

陽子様、陽子様は今回美月様を焚き付け、片山様との会談をセッティングし、美月様の味方でいました。陽子様は今回何を得たのでしょうか？ 面白そうだったからという理由で、見えにくいくらい大きな物を失いました。

片山様は、本当に友達の為という理由だけだったのでしょうか？ 本当に接点を隠す為だけに美月様を帰そうとしたのでしょうか？ ただ一言、彼女は片山様に弱味を握られているとだけ言っておきましょう。

雨宮様は何も知らないまま彼女と別れ、何も知らないまま美月様と付き合い、何も知らないまま過ごしています。作られた現実、隠された真実。本当に幸せなのでしょうか？

美月様、今回のメンタル・レンタル利用者です。皆様の疑問はわかつております。『理想』の性格を返したのか否か？

美月様に自覚はないですが、既に返してもらっています。付き合つたその時点で期間は終了していますから。

なら何故性格が『理想』から変わつてないのか、人間というのはある程度劣化はあっても泳ぎ方や自転車等の乗り方は忘れません。性格もそれと同様、頭が、体が覚えているからなのです。私ならこうする、私ならああすると覚えているのです。

まだわからない？ 美月様の性格は今『零』なのです。空っぽの

状態。その器は一度と満たされることはありません。虚像の性格でこれから生きていくことになります。

誰が『前』の性格を返すと言いました？ 言つたでしょ、代償は『人生』だと……。

この物語では誰一人として幸せな結末はありません。大切な人を失つた者、人の道を外れた者、作られた世界を享受する者、そして、一生を奪われた者。

メンタル・レンタルはこれからも続くでしょう。求める人がいる限り、未来永劫。

語る場がこれっきりというのも寂しいものです。

それでは皆様、今度はお客様としてではなく、『利用者』としてまたお会い出来る日を楽しみにしております。

聞こえてくるはずです。学校、職場、喫茶店やネット、あらゆる所で誘う手が……。

ねえ知ってる？ メンタル・レンタルのこと。そこに訪れると貸してくれるらしいよ。優しいとか明るいとかの性格を何でも。お店とかあるわけじゃなくて……お金？ お金なんて取らないよ。料金は――

最終話 無題（後書き）

以上です。

これまで読んできた日々様、ありがとうございました。

……書くことない。

それでは

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8027t/>

メンタル・レンタル

2011年7月5日03時28分発行